

ACT!



MEDECINS SANS FRONTIERES
国境なき医師団



1999年
ノーベル平和賞受賞

支援者さまと国境なき医師団(MSF)をつなぐニュースレター

2024年4月号



© Sean Sutton



© Sri Harjanti Wahyuningsih/MSF



© MSF



© MSF



© Pablo Garrigos/MSF

自然災害発生から医療の復旧まで

被災地に医療の灯火を

ともしび

地震、洪水、サイクロンなどの自然災害は一瞬で人びとの「当たり前の暮らし」を破壊します。被災直後の心身へのダメージに加え、住まいや仕事への影響、食料不足に感染症の危機……。二重、三重の苦難にさらされる被災地で、MSFは医療の灯火を高く掲げ続けます。

1. 洪水後、井戸の修理のために村を訪れた技術者。
南スーダン洪水(2021年)
2. 村々を訪れ、被災者の話を聞く現地スタッフ。
パキスタン洪水(2022年)
3. 津波から逃げるときにけがをした子どもを診る医師。
スラウェシ島津波(2018年)
4. 輪島市内の被災現場を歩く、MSFのプロジェクト・コーディネーター。ノ能登半島地震(2024年)
5. 肺炎の疑われる子どもを医療施設に搬送する様子。
サイクロン・イダイ(2019年)

CASE 1 アフガニスタン地震(2023) 1分1秒を争う現場で、 医療活動を止めないために



© MSF
2回目のM6級地震後、テント3基を追加で設営する村元。

昨年10月7日、現地時間の午前11時頃、アフガニスタン・ヘラート州でマグニチュード (M) 6.3の地震が発生しました。当時、現地で活動していたMSFのロジスティック・チームリーダーの村元菜穂は、急いで

勤務先の「ヘラート地域病院」へ。「敷地内は、地震の恐怖から入院中の子どもを抱き、急いで建物の外に出たお母さんたちでいっぱいでした。その緊迫した状況を見たとき、地震の大きさと人びとの恐怖を実感しました」と語ります。およそ2時間後には500人を超える負傷者が病院に運び込まれました。「犠牲者の多くは、倒壊した家の中にいた女性や子どもたちでした」MSFは常備していた400人分の

医薬品をヘラート地域病院に寄贈し、備蓄していた医療用テント5基を設営。11日、15日にもM6級の地震が続き、余震への不安が高まる中でテントを3基追加し、緊急援助に注力しました。たとえ被災地で活動していなくても、MSFは世界数カ所にある物流センターから必要な医薬品や物資を速やかに届け、精鋭の緊急チームが出動して初期対応に当たります。災害発生後、48時間以内に



地震の負傷者がヘラート地域病院に運び込まれる様子。

現地へ——。それがMSFの方針です。より早く医療支援を始めることで負傷者の救命率を高め、命の危険が迫る前に水や生活必需品を届けることができるからです。

「今回の経験で、皆さまのご支援が機動的な援助に直結しているのだと痛感しました」。村元はそう振り返ります。

国境なき医師団(MSF)の動き※1 (被災した国・地域にMSFの拠点がある場合)

発災直後～48時間
以内に現地入り

現地にいるスタッフが負傷者の治療や物資提供などの緊急対応を開始

緊急対応と現地調査

被災状況、被災者のニーズ、
医療状況、政府機関・医療機関・
国連機関などとの調整

ニーズ調査に基づく
緊急活動の実施

慢性疾患の対応、水・衛生環境の
改善、移動診療、心のケアなど

医療体制復旧、
感染症対策、栄養治療

※現地の医療・保健ニーズによる

現地の保健省や
医療機関に
引き継ぎ

災害発生

〔超急性期〕

〔急性期〕

〔亜急性期〕

〔慢性期〕

〔静穏期〕



© MSF/Mitsi Persani

復旧した井戸。
地域の人びとが集まる。

CASE 2 マダガスカル サイクロン災害(2022～2023) 健やかな日常を支える 保健・医療体制の復旧へ

干ばつや洪水、暴風雨——。地球温暖化の影響もあり、いま世界中で気象災害が増え続けています(右ページのコラム参照)。被災地では、医療機関も機能不全に陥ることが多いため、緊急対応のみならず、中長期的な視点で人びとを支える医療・人道援助が欠かせません。

アフリカ東海岸、インド洋に浮かぶ島、マダガスカルはここ数年、気候変動による災害に翻弄され続けている国の一つ。2021年に大干ばつに見舞われ、直後の22年には巨大サイクロンが5つも上陸。被害が甚大だった南東部を中心に、家屋をなぎ倒し、数百人が亡くな

りました。米やバナナなど農村の収穫物の8割が被害を受け、食料輸送の命綱でもある道路も寸断される事態に。「サイクロンで農作物が全滅。農業を諦めざるを得ず、収入源が断たれたので病気の子どもの治療費も払えません」。仕事を失い先の見通しが立たない農民の嘆きは深刻です。

マラリア、栄養失調と対峙

そんな被災地マダガスカルを悩ませる健康問題がマラリアです。豪雨や洪水で大量に溜まった水が蚊の温床に。近年は子どもに限らず大人もマラリアで命を落とす事例が増えています。そのため、

MSFは南東部でマラリアの検査を徹底。マラリアの予防薬や蚊帳の配布に力を入れています。もう一つの問題が栄養失調です。2024年4月までに、急性栄養失調の子どもたちは南東部だけで45万8660人に上るという推計も。※2サイクロンによる農作物の壊滅的な被害に加え、交通網の寸断で病院に行けない人が増え、栄養失調に拍車がかかっているのです。



© MSF/Kathryn Dalziel

マラリアの検査の様子。5歳未満の子どもにはマラリアと栄養失調のケアを無償で提供している。



© I.Ako M. Randrianarivelo/Mira Photo



© MSF/Mitsi Persani

左／病院や診療所の多くが損壊や浸水被害を受けた。ヌシバリカ病院も修理と清掃から復旧に着手。
右／MSFの支援により復旧した産科病棟。

そこで、MSFはボートや車、バイクを使った移動診療を展開。遠隔地での栄養治療や医療提供を続けています。栄養失調を診断・治療できるスタッフの育成など保健

施設の支援にも奔走しています。MSFのマダガスカル活動責任者、ブライアン・ウィレットは「度重なる気候変動と貧困を背景に、壊滅的な人道危機はまだ続く」と予測します。

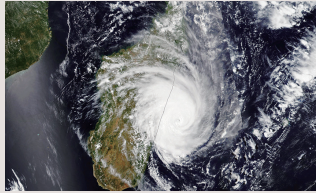
被災地が健やかな日常を取り戻すためには、現地の保健省や医療機関と連携しながらの息の長い支援が不可欠。皆さまの応援を力に、MSFは被災地の人びとに寄り添う支援を続けていきます。

※1 末藤千翔(現地副活動責任者)監修。実際の活動時期や内容は被災地の状況や医療ニーズによって異なります。
※2 Integrated Food Security Phase Classification (2023)

Column

気象災害が50年で5倍に 発展途上国に被害が集中

世界気象機関(WMO)によると、2019年には洪水や干ばつ、記録的サイクロンといった気象災害の数が過去50年の5倍に増加しています。地球温暖化の影響で暴風雨の規模が甚大化しているだけでなく、陸地の乾燥が進むことで干ばつや森林火災などが起きやすくなっているのです。過去50年の気象災害による犠牲者の9割以上が発展途上国に集中。アフリカ東部やインド洋沿岸など、貧困や食料不安にあえぐ地域の人びとが、気象災害による被害に二重に苦しめられている厳しい現実があります。



渦を巻く大きな雲がサイクロン・フレディ。2023年にマダガスカル東海岸を襲った。
© NASA Earth Observatory image by Lauren Dauphin, using VIIRS data from NASA EOSDIS LANCE, GIBS/Worldview, and the Joint Polar Satellite System (JPSS).

緊急事態発生時、援助活動のはじめ方

むらた しんじろう
村田慎二郎シリアやイエメンなどで、
現地活動責任者として緊急
援助活動を統括。2020年
よりMSF日本事務局長。

© MSF

「国境なき医師団 (MSF) は『緊急事態にいち早く駆けつける』とよく言うけれど、一体どうやって活動をはじめめるの？」 日ごろ皆さまからよくいただくご質問に、事務局長の村田が答えます。

Q1. 援助活動の実施は、
どのようにして判断するの？

主に下の3つの基準で進めます。その大前提にあるのが「独立・中立・公平」という活動原則で、このとき特に重視するのが「公平性」です。「平等」とは異なり、医療を「ある」ところではなく「ない」ところに提供するという考え方。つまり、ニーズに対して、医療が圧倒的に不足していることの解消

を目指します。援助が必要と判断すれば、現地にすぐさま緊急チームを派遣。独自の調査に基づき、活動の詳細を詰めます。MSFの強みは、政治的な理由で他の援助機関などが入りづらい地域にも入れること。皆さまのおかげで資金の独立性が保たれ、力を発揮できるのです。

私たちの判断基準

- ☒ 緊急の医療・人道援助のニーズがある
(避難民の数、発病率、致死率などの指標を基に検討)
- ☒ 他からの援助がない、行き渡っていない
- ☒ 安全確保などの面に制約が少ない

Q2. 判断に必要な情報は
どのように集めているの？

緊急事態の発生地域に既にMSFの拠点がある場合は、現場や首都にいるスタッフが中心となり、情報を収集します。拠点が無い場合は、緊急チームがその役割を担います。現地の保健省や、

国連機関、他の人道援助団体も重要な情報源です。援助を必要とする人全てに、迅速に行き渡るようにするため、日頃から情報交換や連携、援助が重複しないような調整も行っています。

Q3. 活動するのは
緊急事態の発生直後だけ？

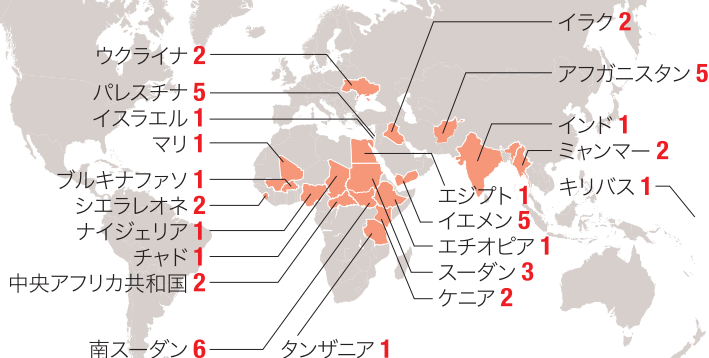
発生直後でなくても、援助の必要性が確認されれば活動します。例えば能登半島地震の対応としては1月下旬より、被災者の方々への心のケアを開始。ニーズに対し、他からの援助がかなり

不足しているとMSFの調査で確認されたためです。日本では、DMAT*のトレーニングや自治体の災害対策に参加し、日頃から緊密に連携。必要に応じて出動できるよう備えています。

*DMAT：災害派遣医療チームのこと。

能登半島地震の活動詳細は

スマートフォンから

日本からのスタッフ派遣状況
21の国と地域46人(2024年2月1日現在)

MSF連絡帳

活動報告

トルコ・シリア地震の現場から

2023年に発生したマグニチュード7.8の大地震から1年。MSFは主にシリア北西部で、紛争と震災の二重の困難に見舞われた人びとへの援助を続けてきました。皆さまのご寄付で実現した援助活動をぜひご覧ください。



スマートフォンから

住所変更は便利なマイページで！

春は転居シーズンですね。お引越しをされましたら、ぜひウェブサイトの「マイページ」から、住所変更のお手続きをお願いします。本ページ下部の二次元コードからアクセスしていただけます。

ニュース
レター **ACT!** 2024年
4月号発行元 特定非営利活動法人 国境なき医師団日本
〒162-0045 東京都新宿区馬場下町 1-1 FORECAST早稲田FIRST 3階

寄付・ご登録情報に関するお問い合わせ

TEL **0120-999-199** 通話料無料

平日9:00~18:00 / 土日祝日、年末年始休業

※ご住所など、ご登録の情報についての変更や、「毎月の寄付」の変更は上記までご連絡いただくか、マイページでお手続きください。

※2024年2月の情報を基にしています。
最新の情報は国境なき医師団ウェブサイトをご覧ください。マイページ参照は
スマートフォンから

遺贈に関するご相談・お問い合わせ

TEL **03-5286-6430** 担当者直通

平日10:00~17:00 / 担当：荻野、今尾

国境なき医師団ウェブサイト www.msf.or.jp